

カマラシーラの修習次第

——その著作をめぐつて——

東

武

チベット佛教史の理解において、注意すべき點は外來佛教、とりわけインド佛教の受け入れ方であろう。それを單なる受容とみなすか、或はチベットの制約における受容として捉えるか、この問題の解明はチベット佛教史における重要な課題の一つであると思われる。

この意味において、流傳前期に活躍したカマラシーラ (Kamalasila 八世紀後半の人) の『修習次第 Bhāvanākrama』という同名の三部作（以下、初・中・後編と略記す）は極めて重要な性格をもつ。第一に、本書の著作がサムエーの法戦——

インド僧カマラシーラとシナの大乗和尚 (Hwasan Mahāyāna) との法戦——と關係を有する點である。この法戦は、流傳前期のチベット佛教史を性格づける大きな歴史的役割をもつたと考えられる。第二に、『初編』チベット譯の奥書に、ラ・ツェンポ、すなわちチソンデツェン王の勅命によつてカマラシーラが著した、という記述があり、本書が王の要請による

著作とみなされている點である。もつとも初編に關してはインドにおける著作であろうとする説もある⁽²⁾。第三に、本書の思想が、後のカーム派、黃帽派に取入れられ、流傳後期の佛教の展開に寄與するところ大であつた點である⁽³⁾。かゝる特性をもつ本書は以上の問題を解明する手掛りとして恰好の素材である。従つてここでは、本書の成立事情に關説する文獻を參照しつつ、この間の事情を明らかにすると共に、この問題の一端を解明したい。

資料の一つにサムエー寺に關する記録集がある（東北藏外 7040）。この書には、王の招請に應じて入藏したカマラシーラが法戦においてシナ和尚を破つた後、當該の三編と『中觀明 (dBu-ma-sna-ba, 東北 No. 3889)』とを著作したという記述が見られる⁽⁴⁾。第二の資料はワシハ (sBa-bshed, rBa-bshed) である⁽⁵⁾。これには、ブトン Bu-ston の佛教史より詳細な法戦に關する記述があり、更に本書三編の成立事情が述べられて

いる。なお、このワシエの記述を襲用するものとして、パーボ *dpab-po* の佛教史がある。

ワシエにおける以下の記載が注意される。すなわち法戦も終り和尚もシナに還つた後、「そこで王は阿闍梨カマシーラに對して、聞思修の三慧によつて一切法無我と決擇する法、それはいかなるものか文書にするよう請問したので、修習次第初編を著して提與した。王は御覽になり意味を考えて、その内容を一座頂に修習するとすればいかに修習すればよいかと請問したので、修習次第中編を著して提與した。そのように修習することによつて、それにおける果はいかなるかと請問したので、修習次第後編を著して果を説き、附隨してかの和尚の誤つた見解を論難して記し提與した」(p. 63, パーボ *ia 119b*) とある。

この記述によれば、本書三編は法戦後にチソンデツェン王の要請のものと著作され、初編は、聞思修の三慧によつて一切法無我と決擇する法、中編はそれに即した修習、そして後編はそれにおける果を所説としていことになる。従つて、右の著作動機に關する記述を史實として容認するための必要條件として、本書三編の内容によつてそれが確認しうるかどうかが問題となる。以下、この記述を參酌しつつ内容を検討する。

初編の梗概は、題名が示す如く修習 *bhāvanā* の次第 *kṛa-*

ma を一貫して論述するものであり、その構成は、悲 *karuṇā* 菩提心 *bodhicitta*、行 *prāṇipatī* の三項目に大別しうる。そのうち、行に關する論述が全體の約八割を占め、その行の修習は聞思修の三慧が基盤となる。すなわち聞所成慧によつて聖教の義を受持し、思所成慧によつて諸法が不生にして無自性たる實義を決定する。その實義を證得するために修所成慧を起すべしとて止觀の修習を説くのである。

かゝる概要からすれば、初編に關するワシエの記述は一應承認しうる。そして、シナ側の頓悟説に對して漸悟を主張した著者の立場を考慮すれば、かような行次第を主題とする論書をもつて王の要請に答えた所以も容易に理解できよう。

この初編の内容に即した修習方法が中編において所望されている。一見、兩編の内容構成は比較的類似しているが、その論述にいかなる相違が見られるか。

まず悲について概観すれば、一切佛法の因の根本は正に悲であるとして、その重要性を多くの教證によつて論ずる初編は、ただ悲の修習方法を説くのみである。これに對して中編では、悲の重要性については極く簡単に觸れるに過ぎず、その論述の大半を、悲と悲に先立つ平等心 *sems-shon-pa*、及び慈 *byams* の修習の説明に當つてゐる。

悲に關するかような論述の相違、つまり初編が理論面を重視し、中編が實踐面を主とする點は菩提心の項目においても

看取される。すなわち初編で説く菩提心の定義、或はその偉大性についての論述を、中編では全て省略している。

行に關しても同様である。初編では、行なくして菩提は得られぬとして、その必要性を教證を擧げて論じ、その行は智慧と方便を自性として、兩者の等持によつて無住處涅槃、中道が可能なること等を説く。また、その智慧には聞思修の三慧を説き、思慧の修習においては、教證と理證との兩面から諸法の不生、無自性性を詳説する。然るに中編においては、かゝる説明的論述を一切省略し、菩提心の項に續いて直ちに修慧に屬する止觀論を説く。

行、つまり實踐を廣義に解すれば、聞思修の三慧は當然それに包攝される性格のものである。しかし狹義に解釋すれば、三慧における實踐は修慧のみに限られよう。従つてかような觀點に立てば、兩編の内容構成の相違も自から理解されるのである。

また、實踐面を強調する中編の性格は他の個所にも散見する。例えば、中編のみに説く止觀の資糧なるものは、その修習の前段階における善根、功德の具體的説明であり、また、禪定における結跏の説明なども極めて具體性に富む敘述である。

かく對比すれば、修習次第という言葉は行次第を總括的に論述する初編に對して、中編はその實踐面を強調して説いて

いると見ることも可能であり、この意味においてワシエの記述は容認しうるのである。

後編の内容は、奢摩他と毘鉢舍那、つまり止觀論を論述する前半部と、それらの論述から派生する問題點を論難、答釋の形式で敘述する後半部とに大別できる。ワシエによれば、前半部は修習における果 *prajñā* が所望され、文字通りに理解すれば、修習による利益、もしくは佛果がその所説として豫想される。しかしその意味では後編の内容と一致しない。従つてここでは、修習における歸結、つまり悲を始めとする諸資糧における修習の歸するところと理解すれば、それすなわち止觀の修習に外ならない。後半部に關しては、その徵難の一部を、ワシエを始めとすと佛教史類が法戰におけるシナ和尚の説とみなしている點からして問題はなからう。

かように見れば、本書三編の内容に關するワシエの記述は一應容認しうるわけであるが、これを以て記述全體をそのまま史實と受取ることは控えるべきであらう。本書の内容を参照の上、後に上引の記述を補足したとも考えられるからである。ただこの場合、本書三編の著作動機を王の要請によるとする點に限つて言えば、まず歴史的事實とみなして誤りはあるまい。

従來古代チベット佛教は王室佛教として理解され、それを支えるものとして、當初から金光明經が重視された。この經

は鎮護國家、滅罪穰災の思想を説く經典として知られているが、かような現世利益を説く佛教の性格上、一面では實踐が強調され、戒律を重視すると共に、善行による福德資糧の蓄積が要求された。六波羅蜜、特に施波羅蜜、十法行、十善業道が高揚されたのもこの意味においてである。かゝる思想を背景として、王みずからの功德積聚のために、古代チベット佛教は庇護され、育成されて來た。

ところで、シナ和尚の布教について、ワシエはかく述べている。「シナ和尚マハーヤーナと言ふ者がやつてきて、『身口の善法行を爲すことによつては成佛しない。憶念なく作意なき靜慮によつて成佛する』と言つて禪定を教説したので、チベット人は次第に彼の法を學び、サムエーに對する供養はなくなつた」(p. 54, *Ba-po ja* 114b) 云。

このシナ和尚の福德資糧を輕視する禪定主義は、前述の如き特性をもつ本來のチベット佛教とは根本的に相入れぬ性格のものであつた。従つて、法戰における勝敗はともかくとして、王室佛教の性格からすれば、シナ和尚の頓悟佛教よりも、シャーントラクシタ、カマラシーラの説く漸悟佛教の方がより受容しやすい面を有していたのである。かように考えれば、カマラシーラが本書を著作した直接の因が王の要請にあつたとしても、その重要な遠因の一つは、かゝるチベットの性格を有する王室佛教の要請にあつたことを見逃すわけに

はいかないのである。

1 G. Tucci: *Minor Buddhist Texts part II*, Roma, 1958, p. 282.

2 芳村修基博士「カマラシーラの修習次第」佛教學研究 No. 8.

9 昭和28年、一七五頁は、初編のシナ譯『廣釋菩提心論』施護譯(大正1564)の存在によつて、原本はインドにおける著作と推定されてゐる。ただこの場合、法戰後、施護の入宋(A. D. 980)まで約二百年の期間があり、當時の地理的、歴史的情勢を考慮すれば、チベットにおける著作と見ることも十分に可能である。

3 羽田野伯猷先生「カーダム派史」東北大學文學部研究年報、第五號(1954)一八六頁參照。

4 The Samye Monastery, ed L. Chandra, (*Satapiṭaka vol 14*), New Delhi, 1961 p. 26

5 Une chronique ancienne de bSam-yas; sBa-bshed, éd. R. A. Stein, paris, 1961

6 Mkhas-pahi-dgeh-ston of Dpaḥ-bo-gtsug-lag, part 4, ed. L. Chandra, (*Satapiṭaka vol 9*), New Delhi, 1962

7 gñan gcig gi thog tu (gnan) 'stan thog gcig tu (バーボ)。ツウチ教授は only one Vehicle と譯しておられるが恐らく讀み違ひであらう。G. Tucci: *ibid.* p. 41.

8 羽田野先生の講義による。この經典は流傳前期に少くとも三回は翻譯されたという。先生には多々御教授をいただいた。